新しい教育空間に関する取り組み　2007年度

1．はじめに

現在、コラボレーション・センターでは、「新しい教育関係ユニット」として、「新しい教育空間・洛風中学校」への関わりを進めている。2007年度の活動報告にあたっては、この取り組みがどのような目的をもち、どのように進められてきたのかという歴史的経緯を紹介しながら、現在の取り組みを報告し、今後どのように発展させていこうとしているのかという抱負へとつなげていきたい。

2．学校という「場」

子どもにとって、学校は大切な育ちの場である。保護者の願いも心に抱きつつ、教師は日々、子どもたちと時を共有する。しかし、学校という「場」が、必ずしもそうした願いを実現させるのに適切なものになるとは限らない。いくら、教師、そして子ども自身が努力したとしても、学校という場が、あまりにもつらく、時には育ちを阻害する場にさえなりうることがある。だから、いじめや不登校といった、「問題」とよばれるものは、子どもたちの「叫び」として受け止められなければならないだろう。

こうした「問題」を、子どもたちや親を「原因」として理解しようとすることはたやすいかもしれない。しかし、こころの「問題」は、犯人をみつけだしたり、原因を決めつけたりしても、なんら解決はしない。罰することや、よくないところを見つけ出して「修理」するといった発想は、少なくとも「こころ」を育てる場にはそぐわないのだ。

では、子どもたちの「叫び」は、いったい何を訴えようとしているのだろうか。子どもたち自身は、「なぜ不登校になっているのか」を、ことばで説明することはできない。なぜか学校へいけないのである。そこで、大人の側がそれを汲み取り、読み取っていかねばならない。まるでなぞなぞを解くように。

多くの人は、学校へいくこと、あるいは、仕事をすることや結婚・出産などは、ごく「普通」のことであり、疑問を感じはしないかもしれない。しかし、たとえば不登校の子どもたちは、このごく「普通」のことに、「問い」を発しているのである。「なぜ学校へいかねばならないのか」と。

3．新しい教育空間

「なぜ学校へいかねばならないのだろう？」そして、「なぜ学校へ行けないのだろう？」。この問いに答えようとすることは、「教育とはなにか」、「今の教育の場がはらむ限界とはなにか」という問いに答えようとすることではないだろうか。現在の学校という「場」のあり方、また、そこでの教育関係の持ち方は、けっして「自明」のものではない。今の「教育」への問いかけが発せられているかぎり、私たちはそこでおこっていることを明らかにするとともに、新しい教育空間、新しい教育関係を模索する試みを始めなければならない。そうした「取り組み」は、すでに始まっているのだろうか？

4．洛風中学校

京都市における「洛風中学校」の取り組みは、まさにそうした「新しい教育空間」の試みの一つだと言えよう。

洛風中学校は、平成14年に始まった構造改革特別区域法に基づき、京都市が国から認定を受けた「京都市不登校生徒学習支援特区」事業として、平成16年10月に開設された、不登校生徒のための自立と学習支援を目的とした公立の中学校である。この「洛風」という名前は、「これまでになかった形の中学校として京都に新しい風を起こしてほしい」という願いが込められているという。

この学校は、単に、不登校生徒を学校に来させるという目的のために設置されているものではない。子どもが生き生きと登校できるような学校とは、どんな学校なのか、それを模索している学校なのであり、教育の未来へのヒントをさがしている学校とも言える。建物は鉄筋であるが、教室はふんだんに木が使われており、少人数で授業が行え、また、子どもたちが自在にリラックスできるようなきめ細かい配慮が随所にみられる。カリキュラムにも工夫がなされ、「創造工房」や「ヒューマン・タイム」など、ユニークで実質的な体験を生かすような時間をもっている。

▶洛風中学校

5．コラボレーション・センターとの関わり

京都大学大学院教育学研究科は、心理臨床学関連領域の講座を中心として、この洛風中学校に開設当初から関わってきた（洛風プロジェクト）。その際、ス

クールカウンセラーや、学習ボランティアなど数多くの「関わり」があるなかで、我々がどのように関わっていけばいいのか、洛風中学校にとって「役に立つ」関わりとはなにかということを模索しながら、ゆっくりとしたアプローチをとるよう、心がけてきた。こうした関わりを続けるなかで、不登校「問題」に目を向けるだけではなく、「学力をどう確保していけばいいのか」、「そもそも自分たちがおこなっている教育実践がこれでよいのか」、「その意味はどのようなものなのか」、「外部からの視点で、私たちの教育実践をとらえなおしてほしい」といった声が、教師の側から聞かれるようになった。

コラボレーション・センターが発足してからは、こうした教師の声にこたえるべく、関わりを開始することとなった。

まず、教員、大学院生が洛風中学校を訪れるなかで、これまで学校運営に努力されてこられた先生方の「生の」声を聞くことになった。新しい実践は、必ずしも平坦な道ではなく、試行錯誤の繰り返しのなかでは、傷も負う。学校に「外から」関わるものにとっては、こうした一つ一つの実践過程をともに歩む姿勢が、とても大切なものだと考えられた。

一方で、「外から」関わるからこそみえてくるものもある。学校における実践の「意味」を明らかにするのである。2007年度は、これまで関わってきた「心理臨床領域」の教員だけではなく、「臨床教育学」講座の教員も参加することにより、さらに広い、「教育」という視点から教育実践を見守ることとなった。

今後は、さらに関わりの幅をひろげ、教育科学専攻の教員とも連携しながら、「学力」の問題についても関わりをもっていきたいと考えている。

6．新しい教育関係実践の「交流」をめざして

「特区」を利用した、新たな学校運営をするという試みは、洛風が最初ではない。すでに、八王子市では、全国に先駆けて、不登校児童・生徒を対象とする「高尾山学園」が設立されていた。しかし、こうした取り組みは、それぞれが別個に実施されており、相互の関わりはなかった。そこで、2006年２月19日に、全国の教育分野における「特区」制度を利用した取り組みが集まって、「特区サミット」が京都で開催されることとなった。この「交流」の意味は大きいと思う。新たな試みを手探りで進める人たちが集まって、その実践を確かめ合い、また「苦労話」を共有することで、その取り組みを相対化していくことが可能となり、また、連携への可能性につながったといえるだろう。

ただ、このサミットは、意義深い試みだったとはいえ、時間も短く、「顔合わせ」の域を越えることはできなかった。そこで、こうした「つながり」を今後も保ち続けるべく、今年度は、こうした新しい教育関係を実践する教育現場を我々が訪問することで、今後の連携への礎を築こうとした。

今年度訪問が実現したのは、八王子市高尾山学園、愛知県黄楊野高校、和歌山県きのくに子どもの村学園である（研究開発コロキアム報告p. 27参照）。これらの学校は、それぞれに個性的であり、新しい教育関係というものが、画一的ではなく、それぞれにユニークな独自性をもっていることが明らかになった。

▶きのくに子どもの村学園　授業風景

▶黄楊野高校

また、これらの学校は、それぞれに夢と抱負を持って日々の実践に深く携わるとともに、一方では、そうした実践を相対化し、普遍化したいという思いをもたれることもあるようだった。こうした「普遍化」は、「教育とはなにか」という、根本的な問いにつながるものだと考えられる。今回の訪問は、まだ扉をノックしただけにすぎない。今後、こうした取り組みを継続的にすすめることによって、子どもたちが発する心の「叫び」をキャッチするとともに、教育とはなにかという問いを考え続けていきたい。

（文責：桑原　知子）